

大阪経済大学特別招聘教授
経済評論家

岡田 晃

歴史に学ぶ

第二十二回 五つの世界遺産を作った幕末の大工・小山秀之進

観光都市・長崎のインフラを作る

長崎と言えば異国情緒あふれる人気の観光都市。グラバー邸や大浦天主堂、石畳の坂道などが有名だ。だがそれらを作った小山秀之進の名（後に秀に改名）を知る人は少ない。幕末開国後の日本でいち早く洋風建築を手がけた先駆者で、その中から五つもの世界遺産が誕生したのである。

秀之進は一八二八年、肥後国天草（現・熊本県天草市）に生まれた。生家の小山家は地元随一の大地主で、海運業や土木事業などを営み、長崎にも進出していた。

一八五八年、幕府は米国など五カ国と修好通商条約を締結、翌年に長崎を開港。これに合わせ、港に近い大浦海岸一帯を埋め立て、後背地の山手地区を含め外国人居留地を造成する計画を立てた。だが何しろ前例のない大規模プロジェクト、工事を引き受ける者がいなかつたという。

そこで名乗りを上げたのが、秀之進の兄・北

野織部だ。天草で干拓事業を数多く手がけた経験を活かし、秀之進をはじめ小山家を挙げて事業に参加した。天草から数百人を超える作業員を集め、天草の良質の石材を船で運んだ。石材は港の岸壁や川の護岸に使い、道路や坂道にも敷き詰めた。これがオランダ坂の発祥である。

どれも難工事だったが、一年余りで完成。新たな造成地には、領事館や貿易業者のオフィス、銀行、ホテル、飲食店、住宅などが次々に建てられていった。大浦地区では現在でもその名残あふれる建築物や景観を見ることができる。

まさに、小山兄弟の挑戦なくして今の長崎はなかったと言つても過言ではない。このリスクを恐れないチャレンジ精神は秀之進の真骨頂となる。

グラバー邸、大浦天主堂… チャレンジ精神と技術力で建築成功

を依頼された。

山手地区の丘陵中腹に建てられた邸宅は一八六年に完成。木造の洋風建築で、建物周囲の石畳の広いベランダ、室内の英國式暖炉など、当時の日本にはなかつたものばかりだ。その一方で秀之進は、屋根を日本瓦で覆うなど和風の意匠も随所に取り入れた。

グラバーはここを拠点に薩摩や長州を支援し、明治維新の陰の立役者となる。邸宅は増改築を経て今日まで保存され、一〇一五年に「明治日本の産業革命遺産」の一つとして世界遺産に登録された。

また周辺一帯はグラバーリーとして整備され、園内には同じく英國人貿易商のオルト邸、リンガード邸も現存する。これらも秀之進の作だ。このうちオルト邸の設計図が保存されており、それには寸法がフィートとインチで示され、その箇所ごとに、尺貫法に換算した寸法が筆で書き加えられている。西洋の最新技術と日本在来の技術を融合させ、建築のイノベーションを成し遂げたのだ。

この秀之進の名前を聞きつけたのがフランス人神父、フューレだ。同神父はグラバー邸の隣接地に教会堂を建てることを計画し、工事を秀之進に依頼した。

教会堂という、これまた未知の仕事である。建物正面の屋根の中央に大尖塔と左右に一本ずつの小尖塔、内部の天井は八本のアーチを梁のように押し出して並列させたりブ・ヴォールトと呼ばれる形状など、見たことのないものばかりだ。

そのうえ、当時の日本ではキリスト教はまだ禁止されており、教会堂はあくまでも外国人向け限定で幕府が許可したものだった。そのような建築を請け負うこと自体リスクであり、相当な覚悟が必要だったはずだ。それでも秀之進と大工たちはチャレンジ精神と高い技術力で見事に作り上げ、一八六四年末に大浦天主堂が完成した。



その三ヵ月後、ある奇跡が起きる。見物に来た様子の男女十数人が神父に近づき、「私たちの心はあなたと同じです」とささやいたのだ。二百五十年もの間、密かに信仰を守り続けた日本人がいた——ヨーロッパで「信徒発見」と呼ばれた奇跡の舞台を、秀之進が用意したわけだ。

今では現存する日本最古の教会となり、大浦天主堂をはじめとする「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が一〇一八年に世界遺産に登録されている。

炭鉱開発で失敗、財産を失う それでも再起、近代築港を実現

秀之進は続いて一八六八年、長崎湾沖合にある高島の炭鉱開発に乗り出す。グラバーが日本で初めて機械式の炭鉱開発を佐賀藩と共同で始めるこになり、秀之進に参加を勧めたのだ。グラバーが英國から掘削機械などを輸入し、秀之進は坑口の掘削工事などを手がけた。

だが高島炭鉱が操業を開始して間もなくグラバーが破産、さらに明治新政府による廢藩置県のため佐賀藩も消滅し、秀之進も高島から撤退する。それでも事業欲は旺盛だった。今度は、高島のさらに沖合に浮かぶ小さな島・端島で炭鉱開発に挑戦し、自分の邸宅を担保に借金して勝負をかけた。ところが不運なことに、本格的な開発に至る前に台風の直撃を受けて坑口が水没してしまい、開発を断念せざるを得なくなつた。

秀之進の高島と端島の開発は挫折したが、両炭鉱はその後、曲折を経て三菱が買収した。やがて

端島は軍艦島と呼ばれ、高島とともに日本有数の炭鉱に発展する。そして昭和の時代に閉山した両炭鉱の跡はともに「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として世界遺産となつた。

さて、財産を失い失意のうちに天草に帰った秀之進だが、それだけでは終わらなかつた。一八八四（明治十七）年、明治政府が殖産興業のための三大築港の一つとして、天草に近い宇土半島の先端に二角西港（現・熊本県宇城市）を建設することを決め、その工事の依頼を受けたのだ。

オランダ人技師による設計は、埠頭は七五六メートルに及び、岸壁の角は丸みをもたせるなど斬新なもので、埠頭の背後の道路や石橋、排水路なども一体化したオランダ風の都市計画だった。秀之進は当時では老齢と言える五十七歳になつていたが、ここで力を發揮し、三年後に完成させた。日本最古の近代的港湾となり、これも世界遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産に含まれている。

こうして秀之進は五つの世界遺産を作つた。リスクを恐れず挑戦し続ける企業家精神、他に負けない「オンライン・ワントラック技術」、そして新しい時代を切り開く牽引力——そのような小山秀之進のことを見、現代の企業経営者にぜひ知つてほしい。今の厳しい環境を乗り切るパワーになるはずだ。

岡田 晃

（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。
編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇一三年 同特別招請教授。